The Society for Ecocriticism Studies in Japan（SES-J）

エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No.2　April 1, 2018

http://www.ses-japan.org/

— 目次 —

巻頭言「作家たちの声——ル＝グウィンと石牟礼道子の訃報に接して」 1
追悼——ル＝グウィンと石牟礼道子の訃報に寄せて 3
エッセイ「新学習指導要領と文学とエコクリティシズム」 5
エッセイ「メルヴィル学会のロンドン大会に参加して」 6
エッセイ「驚きのワタ（綿）の大木、パイネイラ」 7
News & Information 9

巻頭言

作家たちの声 —— ル＝グウィンと石牟礼道子の訃報に接して

伊藤 詔子（エコクリティシズム研究学会代表）

今年になって1月22日アーシュラ・K・ル＝グウィンと、2月10日石牟礼道子という東西文学の巨星の訃報が相次いだ。環境文学とエコクリティシズムにとっても比類なき重要性を持つお二人は、亡くなる直前まで精力的に仕事をされ、ジャンルも国境も地球も超える不滅の代表的名作『ゲド戦記』『闇の左手』、『苦海浄土 わが水俣病』『天湖』(ブルース・アレンの英訳あり)など多くの作品を遺された。周知のように『石牟礼道子全集 不知火』全17巻・別巻1（藤原書店）に2004年までの作品は集成されている。特に『苦海浄土 わが水俣病』の世界的重要性は、池澤夏樹個人選集『世界文学全集』第3集に唯一の日本文学として収録され、世界10大小説の一つとされていることからもうかがえる。ル＝グウィンにはオレゴン州で開催されたASLE第10回大会で、石牟礼氏には1994年の日本英文学会特別講演で接することができた。お世話をされていた環境文学研究者、赤嶺玲子さんと控え室で少しお目にかかる機会に恵まれた。ル＝グウィンの声は預言者のように低く重く、石牟礼氏の声は高い澄んだもので、両者とも、朝日

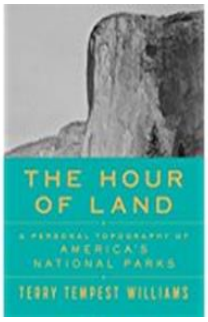
新聞連載中の石牟礼道子エッセイのタイトルをかりると、「魂の秘境から」の声であった。彼岸におられても声は耳の奥に残っている。

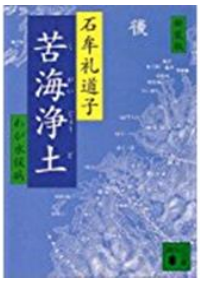
講演の声と言えば、今年のコンコード・ソロー学会、作家生誕200年祭では、テリー・T・ウィリアムスの特別講演が、コンコード第一教会のパルピットから聞こえてきた。文字通り一種厳かなサーモンとして、ソロー文学 200年の重要性を語り、その中低音の響く声が聴衆の心を揺さぶった。開口一番宿舎コロニアルインで「今朝一番 4 時53分に聞いた」というロビンの鳴き声の擬声音的再現を響かせた。というのも最近作 *The Hour of Land: A Personal Topography of America's National Parks* の一つ前の作品 *When Women Were Birds*（『女性が鳥だった時』）でも言っているように、鳥の声に彼女はかつての世界の賛歌を聴くのであった。

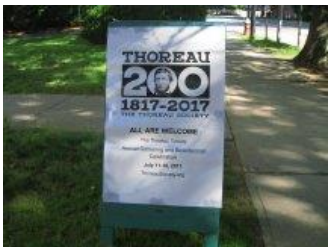
> Once upon a time, when women were birds, there was the simple understanding that to sing at dawn and to sing at dusk was to heal the world through joy. The birds still remember what we have forgotten, that the world is meant to be celebrated. （2017年7月16日の特別講演聴きとりメモより）

この声に接した時、すぐにソロー『ジャーナル』所収の一節"The thrush alone declares the immortal wealth and vigor that is in the forest"を思い出した。ウィリアムスはここでも忠実なソローの使徒であり、実際コンコードの鳥は200年前とあまり変わらない。

しかし勿論ソローの時代も林木伐採による鳥の減少は心配されていたが、21 世紀のアメリカでは比較にならないほど鳥は少なくなっていて、特に最近のアメリカは、劣悪な環境行政で温暖化の進行、気候不順による激甚災害、国立公園の荒廃や国立公園の一部の民間利用への転嫁等々に苦しめられている。環境アクティヴィストとしてのウィリアムスは、上記の後、国立公園の現状を論じた新作、第2章の抜粋を読み、聴衆に国立公園とアメリカの危機を訴えた。彼女は世界的な講演者としても声を発しているが、コンコードという場所にこの危機を救う思想とコミュニティの大いなる源泉があると考えている。







2017年7月12日

メイソン教会前で伊藤撮影

追悼 ―― ル＝グウィンと石牟礼道子の訃報に寄せて

Ursula K. Le Guin, 1929-2018

David Farnell　(Fukuoka University)

For my twelfth birthday, my aunt gave me a boxed set of three novels, the covers of which featured the ocean and sails, wizards and dragons. These were at the time called The Earthsea Trilogy (1968-1972), three of the earliest novels of Ursula Kroeber Le Guin. As a child, I knew nothing about this remarkable writer; I only knew that her stories became my favorites, fantasies that were more accessible than J.R.R. Tolkien's, more human than Robert E. Howard's. As I grew older I discovered more of her works, not only fantasies but also science fiction, magical realism, children's stories, mainstream fiction, essays, translations, poetry, and more, often mixing these genres within a work, publishing in her lifetime dozens of books and hundreds of shorter works, winning numerous awards and honors, and influencing generations of writers. She was, as Larry McCaffery and Sinda Gregory described her in an interview, "probably as responsible as any other writer for changing our notions of what science fiction and fantasy are capable of doing" (26). Her work critiques the current capitalistic and patriarchal hegemonic structures as unjust and self-destructive. She easily ranks as one of America's most important voices, and she passed away on January 22, aged 88.

Le Guin's works are of particular interest to those of us who view art and culture through an ecocritical lens. Environmentalism is one of her primary themes, intersecting with her focuses on feminism, anthropology, and anarchism in her fiction and nonfiction. In contrast to the science-fictional stereotype of lasers and sterile spaceships, from her earliest stories and novels Le Guin has centered the environment not as a mere backdrop but as an integral part of her stories. Like Tolkien, she explores the importance of living in harmony with nature, but she takes it to a deeper level in her Earthsea novels, which eventually expanded to six books. The main people of the first book, A Wizard of Earthsea (1968), are archipelago dwellers who must work with nature, from the lowliest fisherman to the greatest of wizards, or risk harmful disruptions to their communities. Her "ambiguous utopia," The Dispossessed (1974), features a pair of worlds, one very Earth-like in the richness of its environment and its wasteful, despoiling, warring nations, and the other an anarchic, peaceful, gender-equal utopia that survives not only in spite of but to an extent due to its marginally habitable ecosystem, an environment that cannot be dominated but must be worked with. Her worlds are all our world, mirrors that reflect where we are going, but also where we are now and even where we have been. As she says in an essay, "What fantasy often does that the realistic novel generally cannot do is include the nonhuman as essential" (38). In her later Earthsea novels, dragons, a symbol of untamed wilderness, are revealed to be merely another side of humanity. She leaves us with the lesson that our ecology cannot be treated as separate from our selves without the loss of both.

Works Cited

Le Guin, Ursula K. "The Critics, the Monsters, and the Fantasists." *Cheek by Jowl: Talks and Essays on Why Fantasy Matters*. Seattle: Aqueduct Press, 2009. 25-41.

McCaffery, Larry and Sinda Gregory. "An Interview with Ursula Le Guin." *Conversations with Ursula Le Guin*. (1962) Jackson: UP of Mississippi, 2008. 26-46.

追悼　石牟礼道子さん

澤田 由紀子（甲南大学）

私が石牟礼道子さんの著書を読み研究を始めて 10 年程経った頃、思いがけなく石牟礼さんご本人のお話を伺える機会に恵まれた。2009 年 5 月に熊本で開催された石牟礼道子シンポジウムにわざわざ挨拶に出向いていらしたのであった。ご体調もすぐれず無理をされてお越しになったとのことで集った皆さんの前で短い時間お話をされた。そのお話の中で非常に印象的であったのは「今、私は、不知火海の水の体積はどうやって量ればいいのかということを考えています」と発言されたことであった。当時御年 82 歳、『苦海浄土』発表からは 40 年を経てなお、石牟礼さんの日々の生活の中に常に水俣があり、不知火海があり、そして水俣病事件があるのだと痛感したお言葉であった。その前年に発表されたエッセイ「大廻(うまわ)り道行き」（「論座」2008.2）では、幼少の頃に祖母とよく行った水俣川河口から伸びる「大廻りの塘(とも)」の渚が、昭和 22 年からカーバイド残渣プールにされ、そこから不知火海へ流れ出した水銀を含む様々な有害物質の総量は計り知れず、現在も埋め立てられたままで、有名な百間排水口跡地に作られた公園整備のような防備等はされていないと書き綴っておられ、「生き埋めになっている長大な渚の呻吟が聞こえる」と表現されている。この「大廻りの塘」の再生については、2014 年に植物生態学者の宮脇昭氏と対談もされている（『水俣の海辺に「いのちの森」を』2016）。その場を鎮魂と癒やしの森として新しく再生させ、その森作りを通して水俣病事件とは何であったのかを検証し後世に伝える責任がある、とも発言されている。「大廻りの塘」の再生は道半ばであった。

石牟礼道子という大きな存在とその喪失の意味をどう語り得るか、それは、一人の人間としての生き方、そして作家として詩人としてのあり方を見つめ直すことではなかろうかとも考える。再生を目指していた「大廻りの塘」は、幼い「みっちん」にとって最初の自然との共生の場であった。そして「陸と海の、生まれたての生命たちの行き来する場所」であり、狐や河童や姿の見えない神様方である「あの衆(し)たちの遊びにこらすところ」であった。思えば『苦海浄土』でも描かれた、失われていった豊穣な生類の世界の原点は、この渚から出発したものといえよう。その生類の世界との深い繋がりがあってこそ石牟礼文学は成り立っている。石牟礼さんは我々にバトンを渡して旅立たれた。石牟礼さんが生涯をかけて問うた近代における生命のあり方を、その作品からしっかりと受け取って未来にその意味を伝え続ける、第二走者になる覚悟が今我々に求められている。

エッセイ

新学習指導要領と文学とエコクリティシズム

塩田　弘　（広島修道大学）

新学習指導要領が 2020 年度から順次実施される。2022 年度から実施される高校の学習指導要領の改訂案(2018 年 2 月)では、「地理歴史」と「公民」の改革が注目されたが、小学校三年生からからはじまる「英語」をめぐる大きな改革も社会的な関心となっている。中央教育審議会の答申(2016 年 12 月)では、小学校、中学校、高等学校における四技能の指導について領域別に目標が示されたが、この中で「話すこと」は、「やり取り：interaction」と「発表：production」という二領域に分かれており、「コミュニケーションに主体的に取り組んでいける能力」を身につけることが求められる。小学校から高校までの到達目標として一貫して「話すこと」により重点が置かれるのである。

これに歩調を合わせて、大学入試の方法も変わる。2020 年度に始まる大学入学共通テストの英語では、現行のマークシートの試験に加え、「話すこと」を含めた英語四技能を測定するために民間の英語試験を受験生に課すことになった(2017 年 11 月、国立大学協会総会)。民間の英語試験として、英検（日本英語検定協会)、GTEC (ベネッセコーポレーション)、TOEIC (国際ビジネスコミュニケーション協会)などの七種類前後の検定試験が想定されており、受験生には複数回の受験チャンスが与えられる。

このような英語教育の改革について問題点を指摘して批判する人は多い。鳥飼玖美子『英語教育の危機』(筑摩書房、2017)、 阿部公彦『史上最悪の英語政策―ウソだらけの「４技能」看板』(ひつじ書房、2017)などが問題点を明快に指摘しているので、本小論では取り扱わない。ここでは、新学習指導要領において文学やエコクリティシズムが果たす役割が残されているかについて考えたい。

これまで学習指導要領は約十年に一度改訂されてきたが、「コミュニケーション重視」の旗印のもとに、英語の教科書中の文学作品は減少の一途をたどってきた。現在使われている高校生の英語教科書には、文学作品は追加の読み物“Further Reading”としてかろうじて数ページ掲載されている程度である。教科書は会話やエッセイが中心となっているが、その重要なテーマの一つが環境問題であり、各社の教科書が独自の視点で環境問題について論じている。高校三年生の主要な教科書を見てみると、小笠原諸島の動植物の保護(東京書籍)、ペットボトルの水を通じて考える環境問題 (数研出版)、携帯電話のリサイクルとゴリラの生態との因果関係(第一学習社)、 農業をめぐる「緑の革命」と水をめぐる「青の革命」 (三省堂)など、それぞれがユニークな視点から環境について論じている。それらは「環境と人間の関係を多角的にとらえる」という点でエコクリティシズムに通じるものでもある。「高校の学習指導要領の改訂案」によると、「自らの考えを表現して議論すること、観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめること」を各教科に求めているが、今後も「環境」は様々な形で教科書に取り上げられるに違いない。

新学習指導要領の改訂に合わせて、教育職員免許法も改訂される(2019 年 4 月施行)。英語の教員免許をめぐる改訂の最も大きな点は、「教科に関する科目」として「英語文学」が新たに必修科目となる点である。この科目は、文学史を中心とした「英米文学」に代わるものであり、新科目「英語文学」は、イギリスやアメリカに限られない幅広い英語圏の文学を想定した上で、英語の授業での文学作品の扱い方や活用法を探るため、次の三点を到達目標としている。それは、(1)「文学作品における英語表現」(2)「文学作品から見る多様な文化」(3)「英語で書かれた代表的な文学」を、それぞれ理解することであり、「教材として文学作品を利用する可能性を考えたり」「中・高等学校の英語

科の授業に資する活動を取り入れること」「学んだ内容をもとにディスカッションをしたりエッセイを書いたりすることで、思考や感情を共有し学び合うこと」が推奨されている。今回の改訂は、これまであまりにも文学作品が教科書から排除されてきた小さな反動とも思われるが、これからの中・高等学校の英語の授業で文学作品の果たす役割と可能性が残されていることを示唆する内容となっている。

メルヴィル学会のロンドン大会に参加して

辻　祥子（松山大学）

2017 年 6 月 27 日から 30 日まで、ロンドンのキングス・カレッジでメルヴィル学会の国際大会が開催され、世界中から 200 人近い会員が集結し、交流を深めた。イギリスという地の利を生かした盛りだくさんの企画があり、毎日が興奮と感動の連続だった。一方で、その企画を影で支えてくれたのは、わずか十人たらずのイギリス人のメルヴィリアンたちだった。イギリスでアメリカ文学を専門にするのもかなりの少数派だろうが、さらにメルヴィル研究となると輪をかけて少ないのだろう。大会本部長を務める Edward Sudgen 氏は、本務校のキングス・カレッジを会場に提供するだけでなく、世界中から届く千件以上のメールの対応を一手に引き受け、すべての企画に関与していた。

大英図書館の講堂

今回のメルヴィル学会の共通テーマは “Melville’s Crossings”。メルヴィルの作品に、国境や海を越えた交流を描いたものは多い。したがって、研究発表はそういった物理的な “crossing” にかんするものが多かった。さらには人種・ジェンダー・階級といったあらゆる境界の超越が議論された。四日間の会期中、二日目以降、午後から興味深い特別プログラムが組まれていたので、以下に紹介する。

ハリー・ポッターの場面のような食堂でディナー

二日目の午後は、会場を大英図書館の中にある講堂に移して行われた。まず、Martin Griffin テネシー大学教授と David Shaerf オークランド大学教授兼ドキュメンタリー作家が、「一般の人たちにとって、『白鯨』はどのような存在なのか」をテーマに対談した。Shaerf 氏が現在製作中のドキュメンタリー映画 *Call Us Ishmael* の冒頭 20 分も上映された。この作品にはニューベッドフォードで開かれた *Moby-Dick* マラソンの様子が捉えられていた。これは『白鯨』のテキストを市民たちが 25 時間かけてリレー方式で音読し続けるイベントである。2012 年のマラソンには私も聴衆として参加しており、そのことをあとで Shaerf 氏に話すと「君を見かけたことがあるよ」と言われたので驚いた。

John Bryant 氏による新刊『メルヴィル伝』の音読も素晴らしかった。とくに南米の残酷な奴隷制に対してメルヴィルがどのように反応したかについて触れていて、今までとはまったく違うタイプの伝記になるという。

さらに『白鯨』にたいしてさまざまなアプローチをする芸術家たち三人の対談が行われた。手作りの白鯨のぬいぐるみと写真を組み合わせた Caroline Hack 氏、鯨の絵やオブジェなどを展示している Hichael Hall 氏 、リバプール

で『白鯨』を演劇の形で再現している Shelley Piasecha 氏がパネリストであった。

三日目の午後は、三つのコース（1．キングス・カレッジ周辺のウォーキング・ツアー　2．テート・ブリテンが所有する２万点ものターナー・コレクションの一部を鑑賞　3．グリニッジ国立海事博物館でネルソン総督関連の資料に触れ、実際の戦艦を見学）に別れて、エクスカーションを楽しんだ。私は１を選んだ。メルヴィルが訪れた喧騒のロンドンの街、「独身男たちの楽園」「教会堂２」の舞台になった静かな古いテンプルや庭、印刷工場や印刷会社が軒を連ねる地区、メルヴィルが宿泊したホテル、ベンジャミン・フランクリンが訪れたホテルをめぐり、その都度テキストの朗読や解説を聞いて雰囲気を堪能した。

四日目の学会最終日は、午後からオクスフォードへバスで移動し、「鯨と地震」というタイトルで講演を聴いた。夕方には、そこに併設されているハリー・ポッターの魔法学校のような雰囲気の食堂へ行き、オペラを聴いたあと、おいしいディナーをいただいた。

五日目はオプショナル・ツアーでリバプールまで列車で行き、メルヴィルにまつわる街のスポットを巡った。昔は水兵がうろついていたという路地を通ったり、四人の奴隷の彫像に囲まれたネルソン像を見たりしながら、『レッドバーン』や『ビリー・バッド』の一場面に想いを馳せた。

二年後の 2019 年は、メルヴィル生誕 200 周年を記念し、満を持してニューヨークでの国際大会が企画されている。最初に紹介した Sudgen 氏曰く、「今度は、普通の会員として参加したい」。ごもっともです。お疲れ様でした。

驚きのワタ（綿）の大木、パイネイラ

毛利　律子（サンパウロ人文研究所会員）

ブラジルは 1500 年にポルトガルに発見されて以降、ヨーロッパ列強から続々と人の波が押し寄せた。中でも、探検隊に随行したアメリゴ・ヴェスプッチやイエズス会宣教師、動植物学者、地政学者、画家、博物学者などよって発見直後の国の姿が鮮やかに、詳細に記録され遺された。それらの綿密かつ詳細に記録された風土記や自然観察記録から、読者はその頃の風景を思い描いて感興をそそられるのである。

枝から下がる大きな綿

19 世紀初頭になると、二人のドイツ人の博物学者ヨハン・バプチスト・リッター・フォン・スピックス（独:Johann Baptist Ritter von Spix、1781 - 1826）と、カール・フリードリヒ・フィリップ・フォン・マルティウス（Carl Friedrich Philipp von Martius、1794 - 1868）が画家を同伴して上陸した。そして 3 年間の滞在で、6500 種の植物、2700 種の昆虫、85 種の哺乳類、350 種の鳥類、150 種の両生類、116 種の魚類をドイツに持ち帰った。マルティウスが 1840 年から執筆を初めた『ブラジル植物誌』（*Flora Brasiliensis*）は、1868 年の彼の死後、8 カ国・63 名の植物学者が編纂にあたり、フォーリオ版全 40 巻、22,767

種類、3,811 の図鑑、総頁数 20,733 の大植物図鑑が完成した。

そして、22 歳のチャールズ・ダーウィンが英国海軍の測量船ビーグル号に乗船して 1831 年から 5 年間かけ、南米各国の沿岸から南洋諸島まで植物学・動物学・地質学など総合的な調査をした。この時の経験から進化論が構想されていく。彼の生物多様性の開眼は最初の大陸寄港地であったブラジル北東部バイーアやリオにおいてであった。サルヴァドールに上陸した 1832 年 2 月 29 日、23 歳になったばかりの青年ダーウィン（1809 年 2 月 12 日生まれ）は、「草のしなやかなこと。寄生植物の物珍しいこと。花々の美しさ。艶やかな緑の葉。とりわけ、芳醇で多彩な植物にはただただ驚嘆するばかりであった。植物の華やかさに比べると、森はひっそりと鎮まり、辺りに陰を落としている。」（*The Voyage of the Beagle*,http://www.gutenberg.org/ebooks/944、著者訳）と、ブラジルの自然との麗しく初々しい出会いを感動的に記している。『千夜一夜物語』を英語に翻訳した 19 世紀の冒険家で鬼才、リチャード・フランシスコ・バートンは南東部ミナス・ジェライス州を源流として 5 州に跨がり、大西洋に流れる全長 3,160 ㎞のサンフランシスコ川を探検し、流域をつぶさに記録した（*Explorations of the Highlands of the Brazil*）。

3 センチほどの厚い殻

遡って国発見当時の記録、中でも、*Relação do Piloto Anônimo*（『匿名の船員の記録』）は、航海に同行した船員たちの話を集めた叢書である。モンテボルド（ Fracanzano da Montalboddo 生没年不詳、ポルトガル人作家 João de Sá と言われる）は本書をイタリア語からポルトガル語に翻訳した。それには、インディオとの交流、食べ物、植物、風土などが記されているが、その中にワタ（綿）の記載がある。ワタはアジアにもアフリカにも豊富な種類が報告され、それはブラジルインディアンが栽培していた海島綿（学名：ゴシピウム・バルバデンセ“Gossypium barbadense”）といわれている。綿花は植物学上はアオイ科の属の一つゴシピウム属（Genus Gossypium）に属し、約 40 種の多年草から成り、熱帯または亜熱帯地域が原産の植物である。現在、サンパウロ市内や各地でよく見かけるワタの大木は、ブラジル、ボリビアを原産とするパイネイラという樹高 20 メートルにもなる落葉高木で、日本では、その実が徳利に似ていることから、トックリキワタと呼ばれている。大木の枝からぶら下がるのはフットボール大の大きな白いぼんぼりのようなフワフワの綿玉である。茶色の実は洋ナシ形をし、熟すると硬い殻が弾ける。

この中の綿をパイナと呼ぶ。綿の合間に大豆より少し小さめの種が入っている。その種は綿に包まれて遠くへ飛んでいくというのだ。年によって異なるが、風が吹くとワタは牡丹雪のように静かに舞い落ち、まるで残り雪のように辺りに広がる。昔からこの天然素材の綿を使って、枕や布団を作ったそうである。初期移民が内陸を開拓する際には多くの木を切り倒したが、パイネイラの木は残してきた。そのため、今もパイネイラの木はポツポツと残り、花の季節になると、日本の桜の開花期に合わせて咲くこの紅色の花を「ブラジル桜」と呼んで愛でるのである。ブラジルで俳句や短歌をたしなむ日本人や日系人の間では、パイネイラは季語として使われ、その果実の綿のパイナは「パイナ飛ぶ」という枕詞になる。

パイネイラの花

News & Information

◆◆大会報告◆◆

第30回SES-J大会報告

水野　敦子　（エコクリティシズム研究学会事務局）

記念すべき第30回大会は、2017年8月5日（土）に、県の施設「サテライトキャンパスひろしま」で開催された。節目の大会が、原爆記念日前日に平和公園近くの会場で開かれたことは、「核と環境」をテーマの一つに掲げる本学会にとって感慨深かった。真野剛氏の総合司会のもと、学会代表の伊藤詔子氏の開会の辞から始まり、午前中は2つの研究発表とワークショップ、午後はシンポジアムと特別講演があった。

研究発表は、谷岡知美氏「アレン・ギンズバーグとボブ・ディラン――アメリカ1970年代の風景」（司会：塩田弘氏）、平瀬洋子氏「『グレート・ギャツビー』におけるエコクリティシズム――ギャツビーとgreenの関係について」（司会：浅井千晶氏)があった。ノーベル文学賞を受賞した話題のシンガーソングライターとビート詩人との関係についての映像を交えた発表や、フィッツジェラルドをエコクリティシズムで論じるという斬新な発表を聞くことができた。

ワークショップは、「*Material Ecocriticism*　(Indiana UP, 2014)を中心とするマテリアル・エコクリティシズムの動向について」と題して行われ、難解な批評書を、伊藤詔子氏、芳賀浩一氏、また、当日やむをえない事情で欠席された藤江啓子氏の原稿を代読された松永京子氏が解読され、参加者との活発な質疑応答が展開された。藤江氏は、司会をされる予定になっており、とりまとめの労をとられてきた。

午後は、シンポジアム「核とポストモダン文学」が松岡信哉氏の司会のもとで行われた。松岡氏からテーマについて概説があり、そのあとで各講師の発表があった。松岡氏はドン・デリーロと大江健三郎、三重野佳子氏はバーナード・マラマッドとポール・オースター、デビッド・ファーネル氏は、フィリップ・K・ディック、川村亜樹氏はジョナサン・フランゼンの作品をそれぞれ取り上げ、ポストモダン文学のなかに現われる核の時代における人間と環境との関係性について各氏が考察された。

特別講演では、渡邊克昭氏が「ドン・デリーロの惑星的想像力の場としての“Convergence”――『ゼロ　K』における「ポストヒューマン・ボディー」とアース・アート」（司会　伊藤詔子氏）について講演された。絶滅と進化が交錯する地球の悠久の時間を射程に入れたデリーロの惑星的想像力についての論考は、非常に刺激的であった。最後に、浅井千晶学会副代表が、閉会の辞で全体の総括をされた。

懇親会は、「ホテルサンルート広島」15階の日本料理店吉水で行われた。特別講演の渡邊氏やシンポ講師の川村氏の挨拶があり、平和記念式典を翌日に控え、多くの人が行き交う平和公園を眼下に見ながら、和気藹藹とした雰囲気のなかで宴が繰り広げられた。

翌日の原爆記念日に、平和公園散策を呼び掛けたところ、6人の参加者があり、広島市の無料ボランティアの案内で平和公園内を散策した。記念すべき大会はこうして成功裏に終わった。

◆◆大会情報◆◆

第 31 回エコクリティシズム研究学会大会

日時：2018 年 8 月 11 日（土･祝）9 時 50 分～17 時

会場：愛媛大学法文学部本館 8 階大会議室　〒790-8577　愛媛県松山市文京町 3 番 https://www.ehime-u.ac.jp/overview/access/johoku/

総合司会 稲富百合子

9:50 開会の辞 伊藤詔子（SES-J 代表）

10:00～11:10 研究発表

研究発表 1．10:00～10:35 種子田香　（司会：濱本隆三）　「心象風景としての植物描写――エレン･グラスゴウの『不毛の大地』より」

研究発表 2．10:35～11:10 浅井千晶　（司会：大野美砂）　「レイチェル･カーソン『海辺』における生命の織物の諸相」

<10 分休憩>

11:20～12:20 **ワークショップ**

「ソロー生誕 200 周年――*Thoreauvian Modernities* を読む」（司会･発表：真野剛、発表：塩田弘、熊本早苗）

12:20～13:10 昼食休憩

13:10～15:10 **シンポジウム**

"Feminism, Queer Ecology, and Ecocriticism: Cultural Perspectives and Cross-Fertilizations"

司会･講師：加藤ダニエラ　招聘講師：Zelia Bora 氏（Professor, ブラジル･バライバ国立大学）

招聘講師：Shiuhhuah Serena Chou 氏（Assistant research Fellow, 台湾中央研究院）　講師：岸野英美

〈10 分休憩〉

15:20～16:20 **特別講演**

青木亮人氏【愛媛大学准教授、NHK カルチャーラジオ　文学の世界「俳句の変革者たち」講師】

司会： 藤江啓子

16:30～17:00 **総会**

17:00 閉会の辞 松永京子（SES-J 副代表）

18:00～20:00 **懇親会**

（幹事と司会：辻祥子、吉田美津。招聘講師のテーブルトークあり）

読書会「お薦めのこの 1 冊」

日時：2018 年 8 月 12 日（日）9 時～12 時

会場：愛媛大学法文学部本館 2 階中会議室

司会：伊藤詔子氏

お問い合わせ先：事務局・水野（mizuno(*)sanyo.ac.jp）

◆◆各種委員会からのご報告＆お願い◆◆

☆（国際）広報委員より☆

会員の出版（単著・共著）・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストと HP でお知らせしますので、出版・学会については塩田弘宛て（shiotah(*)shudo-u.ac.jp）に、書評については大野美砂宛て（misa(*)kaiyodai.ac.jp）にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページ上に掲載する以下の記事を常時受け付けています。皆様のご協力で内容を充実していきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。宛先：三重野佳子（mieno(*)nm.beppu-u.ac.jp）

(1) 「旅する会員」ページ：皆様の旅先や研修先などで撮られた写真を記事と一緒にお寄せください。ページに載せる形に大体整えてワードファイルあるいは PDF ファイルでお送りください。

(2) 「エコクリティシズムテーマの概要」で、現在のテーマの他にもご提案がありましたらお寄せください。出版計画委員会で掲載を検討します。

(3) 国際広報委員に寄せられた会員の皆様の出版情報を News ページで研究情報として掲載します。

(4) 会員の出版物に関する書評情報を HP 上に掲載します。掲載するのは、会員が執筆に関わっている書籍で、執筆者から広報委員に連絡があったものとします。詳細は改めて広報委員からご連絡させていただきますので、ぜひ情報をお寄せください。

☆事務局より☆

●新入会員のご紹介

2017 年 3 月から 2018 年 3 月までの新入会員のご所属とご専門をご紹介します。（50 音順）

齊藤みどり氏（都留文科大学、カリブ海文学、ポストコロニアル文学、比較文学）

西　亮太氏（中央大学、英語圏ポストコロニアル批評、批評理論）

吉本光宏氏（早稲田大学、メディア・映画研究、文学・文学理論、日本研究）

●会費納入のお願い

年会費4000 円（学生会員3000円、シニア会員2000円）のご納入を、同封の振込用紙で2018年6月末日までにお願いします。4月1日現在で満66才以上の方はシニア会員になることができ、会費は2000円になりますので、希望者は、事務局の平瀬洋子（danbara@mpd.biglobe.ne.jp）まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしくお願いいたします。ご寄付については差支えのない限り、会計報告にてお名前を報告させていただきます。

振込先： ゆうちょ銀行　 加入者名 エコクリティシズム研究学会　口座番号 01380 - 4 - 96525

●住所、ご所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、住所やメールアドレス・所属等に変更があった方は、平瀬洋子宛て（danbara(*)mpd.biglobe.ne.jp）に必ずご連絡下さい。

編集後記：今年の冬は強烈な寒波が日本列島に流れ込み、とくに東北、北陸にかけては記録的な豪雪となりました。交通混乱や、車両の立ち往生、屋根雪をめぐる事故など多くの被害が出たことは記憶に新しいところです。被災されたみなさまに心からお見舞い申し上げます。ようやく春が訪れ、深まる暖かさや新たな生命の芽吹きを喜ぶ今日この頃です。NL 第 2 号をお届けいたします。今号では、まず先日亡くなった世界的に著名な作家ル＝グウィン氏と石牟礼道子氏への追悼記事を掲載いたしました。また過渡期にある英語教育改革の中で文学やエコクリティシズムの可能性を探る記事、ロンドンで開催されたメルヴィル国際学会報告、サンパウロの珍しいワタのお話など、充実した内容となりました。執筆者のみなさまに感謝申し上げます。今後も積極的にご投稿くださいますようお願い申し上げます。(H.K)

2018 年 4 月 1 日エコクリティシズム研究学会事務局発行

エコクリティシズム研究学会　代表　伊藤詔子

事務局　〒738-8504　広島県廿日市市佐方本町 1-1　山陽女子短期大学　水野敦子研究室 mizuno(*)sanyo.ac.jp

〒739-0321　広島県広島市安芸区中野 6-20-1　広島国際学院大学　平瀬洋子 danbara(*)mpd.biglobe.ne.jp

〒690-8518　島根県松江市西生馬町 14-4　松江工業高等専門学校 岸野(早水)英美　khidemi4(*)hotmail.com

★スパム防止のためメールアドレスの(*)は@に変えてください。